公開講演会記録

近世以前の日本建築における大陸からの影響
―英国の建築がヨーロッパから受けた影響を考慮して

モリス、マーティン・ノーマン（Martin N. Morris）
千葉大学名誉教授（建築史学）

まえがき

皆様に発表する機会をいただき、たいへん光栄に思っております。今回の講演は、千葉大学で同僚であった佐藤建吉先生に大いにお世話になっており、同先生の依頼に応えて行うものです。

今回の発表では、近世以前の日本建築における大陸からの影響、とくに中国からの影響を中心に述べることにし、両国のつながりを追いかける内容で発表することとして準備しました。

これから取り上げる、大陸からの影響を表す建築のテーマとその側面は、次の通りです。

1．「家屋文鏡」に見る古墳時代の家屋タイプとその由来
2．中国の三合院・四合院住宅と古代日本の宮殿と貴族住宅
3．中国の「都城」と日本の都
4．中国と日本における店舗を含む住居「町家」から構成される町並みの誕生と展開
5．日本の寺院建築における様式とその構成要素（特に「組物」）に見る中国建築の真似

上記、五つのテーマは全て、大陸からの強い影響を受けています。それらを順に話してみます。

しかし、日本建築が大陸から受けた影響という課題は膨大に広く、発表時間などの制限もあり、中途半端にしか理解していない部分もあり、より詳しく語るテーマを二つ選択し、残りについては関わりだけのレベルで述べることにします。

今回は、1．の「家屋文鏡」について、および4．の「町家」に関わる町並みなどについて、重点を置き詳しく検討することにいたします。また最後には、6．西洋文明のいわゆる「衛星国家」イギリスが大陸から取り入れた建築様

式を、日本と英国の比較検討のために概要的に紹介することにいたします。

上記のテーマの話に入る前に、全体的に関わりのあることとして、まず、次の2点について述べておきます。

（1）近世以前の日本建築は、ユニークな側面を当然色々有しているのですが、派生的な側面があることも重要で、両方を認識していないと全体的な理解はできないと思われます。

（2）アジアの一部ながら、中国の大河に当たる東アジアにおける高度文明の重要な発祥地の中心部から離れている日本は、いわゆる「衛星文化」の性格を持っています。朝鮮半島、ベトナム（中国の「越南」）も同様に、中国文化圏の「衛星文化」として捉えられます。また、イギリスもヨーロッパ大陸の「衛星文化」として分類できるので、その観点から、日本の場合との比較は、興味深い側面が多いと思われます。

建築の面における日本と東アジア大陸（特に中国）の類似は、偶然の場合も若干はあるでしょうが、大方は影響を受けた結果によると思われます。これは一部において（特に先史時代において）は、民族の移動と関係して伝播したかもしれないし、また一部においては（それは有史時代となってからと予想されるのですが）、意識的な「もの真似」ではないかとも思われます。意識的な「もの真似」の場合には、例えば、近世以前の日本建築を施工した大工も、その施主である依頼者側も、デザインの良し悪しは、大陸のモデルにどれだけ近づいていたかを判断して、評価したに違いないでしょう。

一方、環境、農業、その延長の文化の基盤ともなる「衣食住」において重大な共通点がつくり出した影響も重要ではないかと思いますが、どれほど意識的であったのかについての判断は難しいといえます。こうして、十分な根拠が不明であるため、また原型のモデルと離れているために、デザイン感覚などの面で、日本で生まれたものとして見られている場合があると思われます。

明治以降では、方向転換が行われ、中国にモデルを求めることを止め、欧米に目を向けるようになったのですが、その場合も、デザインなどの移入のされ方においては、その徹底性と熱心さは、それ以前の中国真似とよく似ているといえます。

1．「家屋文鏡」に見る古墳時代の家屋タイプとその由来

それでは、日本における身分社会・国家成立期を出発点に、当時の日本建築の様子を伝える興味深い史料、奈良県佐味田の宝塚古墳内に発見されたいわゆる「家屋文鏡」（4世紀頃、図1）に関して、そこに見るデザインを通して、当時の建築の様子と大陸建築との関連を見ることにします。この銅製の鏡の裏面に、鈕（ちゅう）を囲む形で、4棟の家屋を表すデザインが施されています。

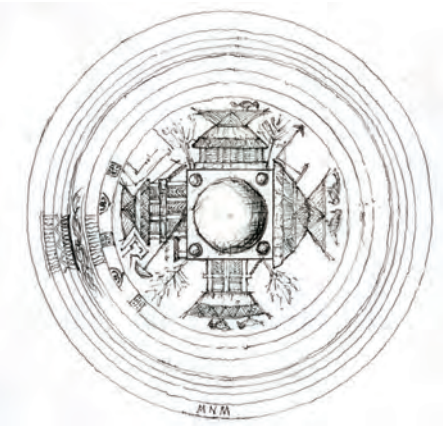

図1　家屋文鏡（4世紀頃、奈良県佐味田古墳出、宮内庁：著者の描き起こし）

時計回りの順番に、その様子と建築史における位置づけについて解説します。

A．正殿

本鏡では、普通、図では上となっているものは、平側から見た基壇に立つ桁行3間の入母屋造茅葺屋根の建物です。横から見て、両端の破風は極端な外転びがある点が特徴となっています。奈良県の寺口和田1号古墳で発見された同時代の家形埴輪が全体的によく似た形式を見せています。この場合、平側の中央に入口があり、明らかに正面となっています。

発掘調査の結果、群馬県の三ツ寺Ⅰ遺跡では、古墳時代（5～6世紀）の堀に囲まれた地方豪族の居館と思われる遺跡において、並行に配置され、板塀に囲まれた二つの区域の一つに、大規模な主屋らしい平地式掘立柱建物の跡が確認され、前に紹介した鏡と埴輪に表現された建造物の実例として充分に解釈できます。この大きな平地の建物を中心に、後ろ（ほぼ北側）の方に細長い付属建物と屋根の架かった大型の井戸があったことが発掘から判明できました。大型平地の建物の前（ほぼ南側）の方は、一部を除いて、未発掘でありますが朝廷の広場が存在したと推定されています。脇の区域も殆ど未発掘でありますが、そこに竪穴住居2棟が発見され、付属施設があったと考えられます。

同時代の中国（六朝～隋）における宮廷の建築は三ツ寺遺跡のものよりもかなり進んでいたと思われますが、四川省の徳陽で発見された漢代の画像付き「磚」に施された上層住宅と思われる「庭院」の図を見ると、塀で囲まれた住宅は三ツ寺と似たように、左右に二つの区域に分かれて、左側の区域は中庭を見下ろす主屋と思われる建物を中心とし、右側の区域はさらに二つに細分され、前の方に井戸と竈を備える付属施設が見られ、後ろに物見櫓らしい数階建ての建物がそびえ立っています。主屋は瓦葺の屋根を持って、三ツ寺の主屋よりも開放的で、進んだ技術の建築でありますが、配置の基本は類似し、日本の居館計画は既に大陸からの影響を反映していたといえます。

技術的なレベルで、三ツ寺遺跡と似た建築が中国の豪族の間で存在したのは、発掘から判断しますと、紀元前1000年よりも前の夏・商時代で、それを代表する遺跡として二里頭宮殿が挙げられます。回廊で囲まれた広場を見下ろす主屋は縁に囲まれた（茅葺屋根の？）平入掘立柱建物でした。「家屋文鏡」に施された第一の建物とそれが建てられたコンテキスト（豪族居館）は既に中国大陸からの影響を表していると見られます。

B．竪穴家屋・住居

時計回りに進んで、「家屋文鏡」第二の建物は、特徴からいうと、全体は第一の建物の入母屋造屋根を直接地面に載せた、軸部のない建物に見えます。建物の左側に棒で支えられた面があり、蔀形式の入口、もしくはポーチとして解釈でき、妻側に入口の存在が推定できます。近くに前庭を囲む低い塀と地面に差された小さい傘（住む人の身分の印？）があります。棟の上に鳥2羽が止まっています。この建物は奈良県東大寺山古墳で発見された同じ古墳時代

の剣の家形飾付環頭とデザインがよく似ています。両方は地面を掘って、床を低くした竪穴住居として捉えられます。

竪穴住居は縄文時代から平安時代初期まで、日本において一般人の住居タイプとして広く分布していたことは発掘調査から明らかです。しかし、竪穴住居は日本だけでなく、アジア大陸の北方にも広く存在した家屋形式でした。中国北部にも事例が多く発掘され、西安近くの半坡村では保全状況が良いため、幾棟かが復元されています。紀元前５０００年頃に建てられた半坡の竪穴式家屋には、４本柱の構造体に支えられた地面まで葺き下ろされた入母屋造屋根と突出する入口通路・ポーチを備えたものもあり、家屋文鏡の第二の建物と形式的によく似ています。

先史・古代日本の重要な竪穴式家屋の伝統はアジア大陸の竪穴式家屋の伝統と深いつながりを持っていたと考えるべきでありましょう。

C. 高床米倉

さらに時計回りに進んで、第三の建物は、平側から描かれた桁行２間の建物です。外転びの破風を持つ茅葺の切妻造屋根を備えた、人が下を歩けるぐらいの高床の建築です。妻側に２階へ上がる梯子らしいものが描かれています。高床下の２間分に網代壁、または簾らしいものが入っており、床の上では、柱の間は板壁となっているようです。

この建物は伊豆北部の韮山町の山木遺跡の出土品を参考に静岡市にある弥生時代の登呂遺跡で復元した米を保管する高床倉庫によく類似し、米倉の表現として広く解釈されています。古代において、高床の倉庫は食べ物だけでなく、唐招提寺の経蔵と宝蔵や東大寺の正倉院など、残存する校倉の例から明らかなように、貴重品の保管にも利用されていました。

高床倉庫も、やはり、日本に限るものではありませんでした。中国雲南省とベトナム北部に紀元前６世紀～２世紀ごろ栄えていた「ドンソン文化」の遺跡から、青銅からできた高床倉庫の模型が発見され、人が校倉に食料を保管しているレリーフ彫刻もあります。時代が下がりますが、ジャワ島にある８世紀のボロブドゥール遺跡の彫刻にも、登呂遺跡の復元のようにネズミ返しを備えた切妻造の高床倉庫が表現されています。高床倉庫は南中国から東南アジアに広く分布した建造物でした。

稲作農業との関係は重要でしたが、実は、縄文時代の日本にも、高床倉庫と思われる建造物の形跡が発見され、さらに調べると、竪穴住居同様、シベリアにも存在しました。また、ロシアとフィンランドに分布する民族の間にも食料を納める木造の高床倉庫が存在します。西ヨーロッパにおいても、高床の穀物倉庫（granary horreo espigueiro）が古代から近世まで建てられ、支えの柱と本体の間にネズミ返しを備えていました。

特に興味深い事例はイベリア半島北部（スペイン北部のガリシア地方とポルトガル北部）に残っています。建物全体が石造で、屋根は瓦となっていますが、ネズミ返しを備える切妻造の単純な穀物倉庫は、弥生時代の登呂遺跡のものと類似する点が認められます。ケルト民族と関係があるといわれ、ロー

マ時代まで遡ると思われます（horreo という言葉はラテン語の horreum つまり穀物倉庫を語源としている）。というのは、２０００年以上も前から、ネズミ返し付きの高床建築（柱の上に載せる巨大な箱）を農業社会の基盤的な食べ物、穀物や稲を保管するために利用することはヨーロッパから極東まで共通していました。

日本では、登呂遺跡や山木遺跡で発見された弥生時代の倉庫が後の伊勢神宮の高床社殿建築の発展に関係が深いと思われ、伊勢における最も原始的な高床建物、外宮の御饌殿は、詳細を見ると、高床倉庫からのルーツを忠実に反映しています。

D．鳥居、トラナ（インド、サンチ）、櫺星門（中国、北京）

話が神社建築に流れましたが、神社境内の入口を表す鳥居にも、大陸に前例かと思われる興味深いものもあります。鳥居には幾つかのタイプがありますが、共通する特徴として、扉がない神聖な空域の入口を表す原始的な構造物です。

アジアにおける最古の残存例としては、インドにある紀元前3世紀のサンチのストゥーパに紀元前1世紀に加えられた塀（ヴェディカ）に設置された入口、トラナがあります。2本の柱と三重の貫らしい材から構成された彫刻豊かな石造物ですが、原型は明らかに木造です。

また、中国に目を向けると、北京において紫禁城の南東に位置する天壇圜丘の区域（明、清代）の入口として、櫺星門と呼ばれ鳥居とよく似たような石造の構造物があります。これは、サンチのトラナと同様に、原型は明らかに木造です。こうして何よりも日本的と考えられていた鳥居でさえ、アジア大陸の宗教建築とつながりがあるようです。

E．高殿、楼閣

家屋文鏡に戻り、最後の家屋を見てみましょう。前の倉庫と同様に、これも2階建ての建築ですが、2階の周囲に欄干付きの縁が巡り、妻側から欄干付きの階段で登るようになっています。平側から見られる桁行3間の家屋で、屋根は最初の建物と同じ入母屋造になっていて、下の階の柱の間に簾らしいものが入れてあります。入口と逆側に屋根のない低い台が置かれ、その上に傘が載せられています。これは当時大君・天皇に使用されたとされるいわゆる高殿という楼閣の表現と思われます。安康天皇の代、「目弱王」は天皇がくつろいでいる「殿の下に遊べり」などと『古事記』に高殿の存在を暗示する場面もあります。

家形埴輪においても、この第四の家屋とたいへんよく似たものが、大阪府美園遺跡などから出土されています。中国では、楼閣は戦国時代の青銅器に施されており、上の階で権力者が参加する儀式が行われ、下の階で音楽団が鐘などの楽器を鳴らしています。

また、時代が下がりますが、朝鮮半島において、宴会用の楼は19世紀まで朝鮮王宮に設置する建造物タイプとなっていました。現在、ソウルの宮殿において、19世紀に再建された慶會楼と呼ばれている大型の宴会用の楼閣（「高殿」）が保存されています。上の階が宴会の空間で、階下は食べ物をそろえる準備空間として利用されました。日本の内裏において、床が特に高い紫宸

殿はこのような楼閣の性格を生かしているのかもしれません。朝鮮の王宮において、19世紀まで残っていたのは興味深いと思われます。

日本が政治単位として成立したと思われる古墳時代の家屋文鏡の建築を見ますと、四つの家屋すべてがアジア大陸の建築類型につながりを持つと見られ、日本は出発から、大陸と離れて理解できない文化であったことを建築の観点からかなり説得できます。

2. 中国の三合院・四合院住宅と古代日本の宮殿と貴族住宅

有史の時代に入ったら、大陸文化との縁が間違いなく続いていました。建築領域におけるその展開をいくつかの観点から指摘します。まず、平安時代に具体的な配置が詳しくわかる最上層の住宅である内裏の場合、その正殿に当たる紫宸殿と正面の前の脇屋に囲まれた中庭の「コの字形」構成に古代からの中国の住宅の基本形の一つ、三合院・四合院からの強い影響が認められます。また、平安時代において、貴族の間に利用される寝殿造の住宅も、三合院の構成を基本としていたとされます。ただし、実際にその左右対称の原型から離れる傾向が目立ち、その後の書院造において出てくる左右非対称の雁行型家屋の配置に日本の独自性が表面化してくると捉えられています。

また、板床に畳を敷き、それを計画モジュールに利用する書院造は日本建築の独自な側面と思われますが、木造住宅に高さ2尺〜3尺の板床を設置し、それを生活面にする概念は朝鮮半島、ベトナムと東南アジアにおいて、特に椅子が普及せず、床生活が続いていた地域の伝統住宅にもよく見られます。漢代までの中国も床生活を基本としていました。とすると、独自的といいながら、日本の住宅建築も、大陸と切り離してしまうと、全体がつかめないと思われます。

3. 中国の「都城」と日本の都

建築の集合体ともいえる都市を取り上げると、やはり、大陸、特に中国からの強い影響が認められます。日本最初の都市とされる古代の都、藤原京、平城京、平安京はともに中国の都城を意識的にモデルにしていたことがよく知られています。規模的にはその3分の1ぐらいしかなかったのですが、構成的に、平城京と平安京はともに隋・唐の長安城とかなり類似します。奥の中央に宮殿と政治機関を置き、都城の入口から、宮殿の入口まで幅の広い1本の軸線道路、朱雀大路を通して、都市を左右対称に、二つの区域に分けていました。中国においても、日本においても、政府により一気に作られた計画都市でした。

この場合、日本が中国を意図的に真似たことは当時の記録から明らかです。中国の政治制度をモデルとする日本は、政治の舞台として、中国の政治都市に基づく首都も必要と感じて、造ったのでした。徹底した合理性で、右京も左京も南北東西の大路と小路を通すことで、碁盤上に配置されたアーバン・ブロックに分けて、最小限のユニットとして、４００尺四方の町が設置されました。おおよそ80町分を占めていた大

内裏を除くと、平安京は１１３６もの「町」から構成されていました。12町分を占めていた市場、８町分を占めていた神泉苑、４町分を占めていた二つの仏教寺院や大学寮、２町分や１町分を占めていた身分の高い役人（貴族）の邸宅が大きな囲いとして存在しました。それらを除くと、残りはレベルのより低い役人の住宅として細分されたか、あるいは、都に集められた職人や労働者の宿泊に用いられたのでした。

この身分による敷地規模の与え方は、藤原京および平城京において既に存在し、平安京においても続いていました。平安京では最も細分された場合の典型は、いわゆる四行八門の形式で、おおよそ１００尺×50尺の「戸主」32個に分かれていました。文書と（特に平城京においての）発掘から都城の様子が浮かび上がります。

大路に直接に面する建物は門以外にはなく、人をかなり超える高さの築地塀がそれぞれの区域を囲んでいました。身分に合わせた形式の門を通して囲いの中へ入り、そこに建物が立っていました。小路なら、築地塀ではなくて、板塀の場合もあったのですが、建物が道に面したのではなく、囲いの中に独立して立っていたのがほぼ普遍的なことであったと思われます。この点は、長安城など、唐代までの中国の都城の様子に基づいていました。

４．中国と日本における店舗を含む住居「町家」から構成される町並みの誕生と展開

平安京の創立からおおよそ７５０年の後、戦国時代の日本の都の様子を有名な「洛中洛外図屏風」（図２）が鮮やかに伝えています。寺院や邸宅、築地塀に囲まれた施設も少なくないのですが、大通沿いに軒を接する商人や職人が住む町家が立ち並び、道に面する店舗が開かれ、にぎやかな街になっています。このように町家から構成された町並みは古代の都と対照的で、その出現が日本の中における市場経済の発展を反映する現象として捉えられています。

このたいへん大きな変化がどのように行われたのか？　創立期の都に、町家が存在したのだろうか？

平城京に８世紀前半にあった長屋王の大邸宅の発掘から、従属人の宿泊施設として建てられた長屋が発見されました。奥行き２間の母屋の南側に庇が付く16間の建物は恐らく桁行方向で、８つの住房に細分されたのです。よりしっかりした建築になっていたものの、法隆寺、薬師寺など、同時代の寺院において、僧侶が住んでいた僧房も似たように、長屋形式になっていました。

図２　洛中洛外図屏風に基づく戦国時代京都町並み復元模型
（国立歴史民俗博物館：著者による写真）

法隆寺の東室と妻室が現存し、この類の建築の様子を伝え、庇付きの大房と母屋のみからなる小子房が平行に立ち並び、身分の高い僧侶とその面倒を見る童の宿泊施設を成していたと思われます。なお、その延長で考慮すると、古代の都に、特別な技術を持っていた職人集団に所属した人たち（鋳物師、大工など）や地元から都に行かされた労働者は多かったことが知られています。

おのおの都における宿泊形態について、情報が限られていますが、４００尺×４００尺の町という、築地塀が巡らされた囲いの中に住んでいたはずです。もしかすると、町（「ちょう」）を「まち」（＝待ち？）とも読めるのは、仕事をしていないとき控える場所を兼ねて宿泊の場所になっていたためとも考えられます。「町」の中に住んでいた人たちに与えられた宿泊施設の多くは長屋であった可能性が高いと思われます。そうすると、平安京の場合の「町」の規模から予想すると一つの町に、おおよそ４棟〜６棟の長屋が平行に並べることは可能と推定します。

長屋と長屋の間の空間は町内の通路になったとも推定できます。規模は異なったかもしれませんがこの囲まれた町の形式は唐代までの中国にも存在したと思われます。つまり、平城京と平安京の前例となる長安城も大路と塀で囲まれ、門を通って入る町からなっていました。町の中に、一般の労働者と色々な職人集団も住んでいたはずです。

中国では、唐代後の宋王朝の時代になると、市場経済が著しい発展を見せ、都市において大きな変化をもたらしたと思われます。本来、宮廷や行政（つまり公の組織）の依頼に対して、ものの作成・生産を行った職人集団は、宋代になると、お金で支払える相手と契約を結ぶようになり、商売が盛んに行われるようになりました。その過程の中で、木戸のようなものが一部は残るものの、町を囲む外壁・塀などが廃止され、町家が直面する町の中の通路が商店街化してしまったと考えられます。

中国における、shophouse が構成する町並みの誕生であり、その様子を12世紀に張択端により描かれた有名な絵巻「清明上河図」において確認できます。北宋の都城、開封府を表す貴重な絵画史料です。

日本の「都城」、京都にも、12世紀に町家で構成された町並みが出現したことは「年中行事絵巻」や「伴大納言絵詞」など、当時の絵巻物から明らかです。町を囲む築地塀が除かれた結果、町内の通路とそれに面する長屋が町並みになった場合と、施設や邸宅を囲む築地塀の外側に長屋が建てられた場合がともにあり、大路を占領する町家増加の結果、都の広い大路の幅が狭くなった原因になったとも推定できます。中国で起きた町並みの変化は日本でも生じ、町家が立ち並ぶ町並みが次第に現れたことは確実で、中国からの影響も考えられますが、興味深い相違点として指摘できます。

「年中行事絵巻」と「伴大納言絵詞」から判断すると、日本の都の大路沿いの長屋風の町家は「清明上河図」で見られる店舗の機能を果たさず、低層役人、舎人や貴族の従属人の住まいになってしまいました。「年中行事絵巻」に

店棚を持つ家屋は2件だけです。つまり、12世紀の平安京の場合、道はまだ殆ど商店街になっていなかったのです。

中世を通して、次第に日本における市場経済がさらに発展し、日本にも店舗を備える町家が立ち並び、商店街を構成するようになり、16世紀に描かれた初期の「洛中洛外図屏風」から判断すると、それが都において本格的に成熟したのは戦国時代であったと考えられます。

「年中行事絵巻」が描かれた12世紀の日本では、店舗を備えていない町家風の住居を長屋のように都の大路沿いに並べる様式を中国の影響によるとしたら、日本の場合、それは中国のような市場経済の発展によるのではなく、単に、中国における町並みの変化の認識と中国最新の町並みの様子を真似したいとの意識にあったのではないかと推察できます。

その後の日本における町家の発展を見ます。その中で重要なのは、中国の町家の建築的特徴を意識し、真似した証拠として、舟木家本「洛中洛外図屏風」など、桃山時代の屏風が挙げられます。そこでの町家の多くは、16世紀中期までの「洛中洛外図屏風」にある平屋とは異なり、総二階の建築であり、しかも、二階は跳ね出し二階になっています。さらに屋根の面より高くなり、正面でも突出する「ウダツ」が目立った特徴になっています。

このような様式は、豊臣時代の京都の特徴と思われ、江戸時代に入ってから、京町家から次第に消えてしまったようです。しかし、江戸後期・明治時代の中部地方、特に長野県における中山道の宿場町などの町家においては、なおそろえていた特徴であると指摘できます。その理由は推定ながら、秀吉が豊臣政権の首都として京都を印象的にしようとし、その中で特徴的な2階建ての町家の建設を進めましたが、徳川幕府は、町家の外観に対して厳しい態度を取り、道を見下ろす本2階をほぼ禁止（かなり広い範囲において、江戸時代中期まで、虫小窓を正面につけた物置程度の厨子2階だけが許された）したからと考えられます。

ルールに従ったところも多いとは言え、無視するか、あるいはルールを調節し、町家に印象的な外観を生かせたところもありました。そのような過程で、中山道の奈良井宿の町家の正面の構えに、桃山時代の京都の町家の様子が生かされたと推察できます。

この中においても、中国大陸からの影響があったのか？　中国における江南水郷町の古い家並みや安徽などの歴史的町並みを見ると、跳ね出し2階と大きな「ウダツ」を特徴とする家屋が多く、しかも、特に「ウダツ」について、その影響はベトナムの首都、ハノイの旧商人地の家並みにも認められます。豊臣政権の京都に最初に日本の町家に現れたと思われた跳ね出し2階と「ウダツ」は、日本に生まれた「様式」ではなく、そのルーツは中国にあったと推測できます。

ちなみに、この点については、中国で話をととめてよいとは言い切れないかもしれません。なぜなら、道に面するこのような店舗を含めた商人の家屋は中国文化圏だけでなく、長いシル

クロードの西端、ヨーロッパにも中世から存在し、その中で、跳ね出し2階は広い範囲において特徴となっており、私の母国イギリス、フランス、ドイツ、東ヨーロッパ、バルカン諸国、トルコなどにもその例が現在も残っているからです。

また、平面構成の側面から見ても、日本の町家とイギリスのMerchant houseを比較すると、共通点が認められます。ここで一つの共通する事例だけを紹介します。イギリス西部の町、テュークスベリーに残存する貸家として、15世紀に地元の修道院によって建てられた長屋形式の商人住居です。16戸からなっており、それぞれのユニットが同じ3室構成を持っています。表の部屋は道に面する店で、その後ろに地炉を備えた居間、その奥に物置があります。三つの部屋は片側通路によってつながっています。居間は、炉の煙を出すため吹き抜けになっており、軒下にある連子窓が煙だしの役目を果たしています。店の上だけに2階が設置され、根太の両端は居間と道にそれぞれ跳ね出しになっています。この2階部屋は夫婦の寝室に利用されたと思われます。

意外にもこの構成は、近世の通り土間を備える1列3室の典型的な京町家とよく似ています。2階の扱いは近世町家の控えめの厨子2階とは異なるのですが、秀吉の時代の京町家と共通しているともいえます。偶然の一致でしょうか？　似た道沿いに並ぶ結果から生まれた共通点からでしょうか？　このように片づけてよいとしても、共通する社会・経済的環境の存在を暗示しており、意義深いと思います。

5．日本の寺院建築における様式とその構成要素（特に「組物」）に見る中国建築の真似

日本の歴史的建築における大陸からの影響については、さらに多くの側面が残っています。大雑把にはなりますが、下に項目①～④として列記しますが、古代日本における最も位が高い建築、すなわち宮殿の中心的な要素に当たる朝堂院と大極殿および仏教寺院の金堂などの建築は、形式と詳細において中国をモデルとしました。

中世になると、宮殿の中心的大ホールの建設を止めることとなったのですが、宗教建築において、中国の建築様式を意識的に利用することは続き、他の建築類型（例えば門、神社の一部）においても、中国からの建築要素・詳細などの利用が続きました。また、仏教寺院において、中国に残っている事例よりも古い中国・大陸様式の建造物が（例えば、法隆寺や唐招提寺において）残っており、歴史的にも文化的にも、アジア全体の建築史において極めて貴重な存在となっています。

日本の仏教建築史の発展を大陸様式の利用の繰り返しとして下記のように概説できます。

①古代において：飛鳥時代～奈良時代の宮殿と寺院建築（白鳳様式や天平様式とその延長で、平安時代を超えて、中世におけるいわゆる「和様」としてまとめられます）。

②平安時代における浄土信仰を伴った様式（建築の詳細よりも、建物の配

置と池・庭園との合わせ方：残存例として、宇治の平等院）。

③中世において挿入される宋の様式、大仏様、禅宗様。④近世において：黄檗宗の寺院に見える中国の明代と清代の様式。

計画から詳細にわたり、それぞれの展開、純粋な様式としての扱いと適当な折衷的な当てはめまでを語ることは、今回与えられた時間と枚数をはるかに超えており、ここでは割愛させていただきます。

むすび

むすびにあたり、簡単に述べておきたいこととして、大陸文明との関連から見て、日本は西洋文明の衛星国家とも捉える列島、私の母国イギリスとよく類似する側面があり、イギリスの文化史および建築史を見て、日本の場合と比較すると、興味深い共通点に気づきます。したがって、西洋文明のいわゆる「衛星国家」イギリスが大陸から取り入れた建築様式を比較検討のために概要的に紹介します。

11世紀から、英国に連続して登場する最も正式な建築様式（ロマネスク、ゴシック、イタリアのルネサンスを通して入った古典様式）は、全部が大陸のほうから伝えられたものでありました。これらの様式は、進んだと思われた大陸文明（あるいは、さらに昔の地中海の古代文明）の領域に所属する、あるいは所属したい強い意志の表明として理解すべきと思われます。日本の中国文明に対する憧れとよく似ているといえます。

ただ、英国内の活用において大陸から導入した様式には、独自な側面がすぐ現れ、地域らしさの表現となったりしました。それは、日本の中国真似の場合にも認められる現象でもありました。様式として定義できるものだけでなく、例えば、前述した道沿いの店舗を兼ねた住居形態などもヨーロッパ大陸の文化圏との共通点も認められ、その意義を考慮することも重要と思われます。

人類の様々な文化や文明のつながりと関連性の整理はまさに人類の本質として、これからいかに進めてよいかを考えようとするときに注意深く検討すれば、大いに参考になるものに違いありません。同様に、恐らく現在では、それぞれの文化圏に関して、膨大となっているそれぞれの段階と側面（様式など）についても、収集したデータを注意深く検討すれば、今までなかった全体像をかなり忠実に把握できる機会を与えるのではと考えます。

長くなりましたが、今回の発表を行う機会を与えていただき、改めて、深く感謝いたします。また、本報告の提出まで、長い間お待たせしましたことをお詫びいたします。

（２０２２年５月26日・オンライン公開講演会）

筆者略歴（Martin N. Morris）

ケンブリッジ大学建築および美術史学部卒業、修士。その後来日し、東京大学大学院で工学修士、工学博士（１９９５年）。千葉大学工学部および大学院で講師、助教授、准教授、同教授、２０２２年３月定年退職。